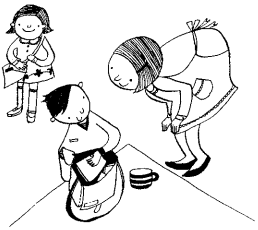
保育の中のあいさつを考える

砂上史子

子どもの生活とあいさつ

たとえば、こんな場面がありました。最近では、中学生や高校生が幼稚園、保育所を訪れて交流する「保育体験学習」が定着しつつあります。筆者が観察に入っている幼稚園に近隣の中学校の生徒が手作りのおもちゃを持ってやってきたことがありました。ホールで幼稚園の子どもたちと中学生が対面します。幼稚園の先生が「じゃあ、中学校のお兄さん、お姉さんにごあいさつしましょう」と声をかけると、子どもたちは屈託なく大きな声で「おはようございます」と声をそろえます。今度は中学生の番、緊張と照れの入り交じった固い表情で「…おはようございます」とさざ波のように少しバラバラに声を出す中学生たち。先生は「あら、おっきいお兄さん、お姉さんのほうが声が小さいですね（笑）」と冗談交じりに声をかけます。



筆者の実感として、子どもは、特に幼児はあいさつが好きで、むしろ大人よりも上手にあいさつ

をすると感じることがあります。それはおそらく登園場面や降園場面はもちろん、園生活の随所で、あいさつすることが望ましい行動として奨励され、保育者自身が子どもにとってのよきお手本として実践しているからではないかと思います。

家庭でも、保護者は折に触れて「こんにちは」「さようなら」と、子どもがまだ発語するかしないかの時期から子どもを代弁するように話したり、子どもが手を振り返すと偉業を成し遂げたかのように褒めたりしています。あいさつすることを当たり前のこと、自然なこととして奨励し、実践しているといえます。乳幼児向けの通信教育でも、子どもがあいさつを楽しみながら身につけられるような遊具が教材になっていることがあります。そのような環境の中で、元気にあいさつをしている子どもたちの様子には、さまざまな人と出会いながら生活することの初々しい喜びが感じられます。

日本の保育の特色としてのあいさつ

実際、日本の集団施設保育や家庭教育の中であいさつが重視されているという事実は、海外の研究者によって指摘されています。日本の複数の幼稚園でフィールドワークを行ったアメリカの研究者スーザン・ハロウェイ（二〇〇四）は、日本の幼稚園では、あいさつも含めた日常生活のルーチンである生活習慣にかかわる活動に多くの時間が割かれ、それが保育内容として重視されていることを指摘しています。

同じくアメリカの研究者で、日本の幼稚園や保育所を訪れたダニエル・ウォルシュ（一九九九）は、日本の保育の長所の一つとして、朝、保育者

と子どもがあいさつを交わし、保育者が子どもを迎え入れる場面を挙げています。ウォルシュによれば、それは単にあいさつを交わしているのではなく、子どもが幼稚園に所属感をもつことや、保育者が子どもの様子を見ることという重要な活動を担った活動であると述べています

登園した子どもたちが保育者はほかの子どもたちと「おはよう」とあいさつを交わしながら、コップやタオルなどの所持品を片づけたり、何気ない会話を楽しんだりする様子は、おそらく多くの幼稚園や保育所に共通したものであると思われます。そのような場面が、海外の研究者にとって「日本の保育」の保育の特色・長所として感じられることは、そこに日本の保育の一つの本質があるのかもしれません。

つまり、リラックスした温かな雰囲気の中で、親しい人間関係を基盤にしながら、生活習慣を訓練的・目的的にではなく、園生活に埋め込まれた活動として保育者の援助を受けながら身につけ、身辺を自立させていくということです。

このことは、幼稚園教育要領の内容にもうかがえます。幼稚園教育要領では、あいさつについて具体的に記されているのは領域「言葉」の内容の「親しみをもって日常のあいさつをする」です。この文言にあるように、単に音声として「おはようございます」「こんにちは」「さようなら」と発音すればいいのではなく、そのあいさつを向ける対象となる保育者や友達に親しみを感じ、あいさつを交わすことに喜びを感じることが重要であり、そうした親しみやそれに基づく関係の上にあいさつが交わされるということです。さらに、幼稚園教育では具体的活動の中で発達の諸側面が関

連していることを考慮するならば、あいさつは「言葉」の領域だけのことではなく、健康や人間関係、さらに子どもの自己表現という視点からもとらえることが大切ではないかと思われます。

あいさつにおける心情と型

しかし一方で、あいさつは場面や状況に対応した定型的なものでもあり、「型」を身につけるという側面ももっています。これはあいさつに限らず、ほかの人に何かしてもらったときに「ありがとう」と言う、人に迷惑をかけたりしてはいけないことをしたりしたときに「ごめん（なさい）」と言う、といった場面に応じた言葉を使うということにも共通するものです。

この点に関しては、前述したように、あいさつに相手に対する親しみを感じることが重要であるという心情面を重視する立場を前提としつつも、「型」があることによって身につけることが容易になったり、「型」があることで心情を表しやすかったりするということも見逃してはならないと思われます。家に両親の知人がやってきたとき、出かけた所で見知らぬ人に親切にしてもらったとき、「こんにちは」や「ありがとう」という言葉があることで距離が近くなったり、かかわりのきっかけがもてたりするという効用があいさつにはあります。何か言わないといけないけれど恥ずかしい、どうしていいのかわからない…そんな微妙な他者との距離を取りもってくれる役割を果たすのがあいさつではないでしょうか。

さらに言えば、あいさつのもつ心情と型という二つの側面をさまざまな場面で経験していくことが、子どもがあいさつを身につけるということに

おいては非常に重要ではないかと考えます。心情か型かというふうに二項対立的に考えるのではなく、その両方の経験が絡まり合いながら、あるいはその二つの間を揺れ動きながら、子どもはあいさつすることを身につけていくのではないでしょうか。ある場面では親しさや喜びの心情と共に自然にあいさつの言葉が出てくることもあれば、別の場面では型どおりのあいさつをすることで他者との距離を縮め、場面に応じて感じるべき心情を自分自身にフィードバックするというように。

こうして、心情と型が絡まり合いながら、大人のまねでオウム返しのようにあいさつをする、大人に促されてあいさつする段階から、自分からあいさつすることや「気持ちのよいあいさつ」と言われるようなよりよいあいさつの仕方やあいさつの「質」が問われる段階へと、「あいさつの育ち」は子どもの育ちと共に進んでいくのではないかと思われます。この場合、保育者が子どもにとってのあいさつのよりよいお手本になることはもちろんです。しかし、「よいあいさつ」「気持ちのよいあいさつ」と言いながら、子どもの心情をあまりくみ取らずに「明るく大きな声ではっきりと」というようなあいさつのひな型にこだわり過ぎないことにも留意する必要があるのではないでしょうか。

幼稚園の登園の場面を想像してみても、走るように保育室に飛び込んできて「おはようございます」と大きな声で言う子もいれば、保育室の様子をうかがうようにやってきて、先生と目が合うと恥ずかしそうにして、先生に「おはよう、○○ちゃん」と声をかけられてから小さな声で「おはよう」と返す子もいます。まずは子どもが自分なりの仕方であいさつをして、それが受け止められ

ることが出発点になるのではないでしょうか。

戸惑いながら緊張しながらを大切に

携帯電話に象徴されるように、現代では、プライベート的な空間や人間関係がいつでもどこでも出現するようになっています。プライベートな空間や人間関係が常に携帯されているともいえるかもしれません。また、連絡も電話よりもメールで行われることも多くなってきました。それに伴い世の中全体として直接対面することなく、あいさつ抜きに親しげにやりとりできる機会が多くなっているといえます。

だからこそ、あいさつを身につける途上にある子どもが直接相手と対面して経験する戸惑いや緊張などが大切な経験ではないかと考えられます。この文章の冒頭で紹介した、中学生の照れや緊張や戸惑いの入り交じったあいさつのように、他者との微妙な距離感からくる不安やもどかしさ、自己を表すことへの気恥ずかしさといった複雑な間合いや機微を自分なりにとりなしていく経験が、あいさつするということの意味ではないかと考えます。さらに言うならば、そのような間合いや機微を感じ取って他者とやりとりすることが、人とかかわりながら生活を営むことの核となるものではないでしょうか。

（千葉大学）

引用文献

スーザン・ハロウェイ 高橋登・南雅彦・砂上史子（訳）『ヨウチエン―日本の幼児教育、その多様性と変化―』北大路書房（二〇〇四）
ダニエル・J・ウォルシュ「子ども文化心理学―新しい発達観―」『乳幼児教育学研究第8号』pp.103-114（一九九九）